

この世界には、いろいろなタイプの人間がいるようです。

野球ファンがいればサッカーのサポーターもいるし、音楽マニアがいるかと思えば、画家志望者も詩人もどきもいるでしょう。

私は長いあいだ乾信一郎（一九〇六―二〇〇〇）という翻訳家で作家、おまけに雑誌『新青年』の編集長もしていた興味深い人物のことを調べてきました。

そこで少し説明を加えますと、『新青年』は大正時代から昭和の戦後しばらく続いた雑誌で、探偵小説やモダンな現代小説を掲載し、多くの作家を育てました。初代の編集長森下雨村、二代目は横溝正史で、江戸川乱歩たち推理小説作家や獅子文六のようなユーモア作家、さらには原爆作家となった大田洋子らも執筆しています。

乾も『新青年』の出身ですが、これはペンネームで本名は上塚貞雄、アメリカ生まれで熊本育ち……そうです、私は彼の評伝を書くこうとして、あれこれ調べてきたのでした。

評伝というのは単純な伝記とは少し異なり、「批評をまじえた伝記」のことですから、ある人物に関しての「書物や文献を集めた目録である書誌」とも違うわけです。

批評と言うからには、どうしても著者の個人的な見解が入るでしょう。それどころか、ドグマに満ちた意見がなければ、評伝は面白くありません。

しかし本書には、「自伝（自叙伝）的に書きたい」という要素もからんでいます。それは乾が「自叙伝を書きたがっていた」という形跡があったからです。いったい、なぜでしょうか？

それは多分、イジメと関係がありそうです。（乾はイジメっ子ではなくて、イジメラレっ子だった

のです。彼は、大正元年（一九一二）にアメリカから熊本に移ったのですが、これがイジメに繋がったらしいのです。

しばしば子どもは、自分らと違った子どもがいると排除しようとしてたり、あるいはイジメます。そうした差別意識は大人にもありますが、上塚貞雄Ⅱ乾信一郎はそれを乗り越えてゆきます。これは評伝的に扱うことが可能ですし、自伝的に書くこともできるでしょう。

ところが、評伝を書くことと自伝を記すこととは、立場がまったく違います。「逆だ」と言ってもかまいません。

極言すれば、評伝と自伝は相容れないわけですし、少なくとも「自伝的な評伝」は困難な仕事のように思われます。そのため途中で、言葉遣いや表現形式に微妙な差の生じることがあるかもしれません、あまり気にしないでください。

大切なのは、彼の行動の軌跡です。彼はなにを考え、どのように生きたのでしょうか？

物語はアメリカでの日々から始まりますが、その後の生活のほとんどが日本なので、和暦漢数字（西暦表示）としました。すでに実例を示しておりますが、生没年は西暦で示し、西暦（和暦）とする場合の年数とか、年齢や学年雑誌の年数などはアラビア数字としました。

引用文献などは、単行本や台本類は「年」までとし、雑誌類は「年月」まで、新聞や手紙類は「年月日」まで記載しました。

このプロローグと謝辞は「です・ます」調で書きましたが、本文は「である」調で書きます。

なお、本文中では文章の流れによって、おおむね敬称を略しております。

引用文は「カギ括弧」で示し、長い場合は前後一行アケで二字オトシにしました。小説などの内容を短く紹介する場合は、「――」で始め「……」で終わるようにしました。引用文の中には、現在の人権意識からみて不適當なものがあるかもしれませんが、原文の意を尊重して、そのままにしました。

なんだか堅苦しいことを書いてしまいましたが、これは研究書ではなくて「自伝的な評伝」という種類の物語ですから、面倒くさいところは飛ばして読まれてもかまいません。

それでは、どうぞ……。

1節 寂しがり屋で無鉄砲で

シアトルにて

ときどき脱線するから、まずは常識的な書き方で始めよう。

だが、いつ、どこで、どうして……という筆法である。

その手でゆくと乾信一郎こと本名・上塚貞雄は、明治三十九年（一九〇六）五月十五日、アメリカはワシントン州シアトル市郊外のベルビュー地区で生まれた。

父・光雄と母・沢の嫡男である。静子という姉さんがいたが、最初の男の子はあくまでも嫡出の長男であり、それが上塚貞雄なのだ。これは乾信一郎についての本だけけれど、この見慣れぬ姓名は彼が勝手に付けたペンネームだから、彼が成人するまでを綴る本章では遠慮して頂くことにしよう。

もう一つ、アメリカで生まれたのに明治何年というのはおかしい感じがだが、アメリカにいたのは幼年時代のごく短期間だから、明治という表現にも慣れておくほうがよいのだ。

それより肝心なのは、彼の生まれたところが広々とした場所だったことと、彼が寂しがり屋だけれど無鉄砲な、そして、空想的なところもある奇妙な子どもだった、ということである。

このシアトルという土地は、十九世紀の中頃に僅か五家族の白人が住み着き、友好的なインディアン酋長の名にちなんでシアトルと名づけたという。ところがすぐにゴールド・ラッシュ

の時代がやって来て、質の良い港と豊かな森林があったので入植者が増加し、東洋からの移住者の玄関口の一つ(注)になる。

といっても、貞雄が生まれた当時は開拓されたばかりで、シアトルの街へ行ってもまだ馬車が主な交通機関だった。家に帰れば、周囲に見えるのは四軒だけで、貞雄の遊び相手になってくれるのはたった二人だったそうだ。これでは寂しい。

むかしテレビドラマに「大草原の小さな家」というのがあった。そんな雰囲気だ。

なぜそんな場所にいたかというと、そこに両親が経営している農園があったからだ。まあそういったわけで、これから上塚貞雄の話が始まるのである。

明治四十三年（一九一〇）、4歳のときのことだ。寂しがり屋の貞雄は自宅から二、三キロ先の森の中に、小さな学校を見つけた。

学校といっても教室は一つだけで大きい子も小さい子もいる。日本の田舎で複式授業をしている小学校を連想して頂いたらよいだろう。そこへ通いだしたのだ。

通学といっても、まだ4歳だから正式の入学ではないし、勉強が好きだったのでもない。ただ授業をしているところを見るのが楽しみだったのだ。ときどき、おしかけ児童が窓の外から眺めているのを見て、学校側が黙認したというだけのことである。

おまけにこの学校は、日曜日には教会になるし、ここのサンデー・スクールに行くのは、とても楽しい。家ではボロ着を纏まとっているのだけれど、その日はセーラー服のような一いち張ちやう羅らを着るこ



左：姉静子、右：貞雄（上塚芳郎所蔵）
（小学校入学当時）

とが出来たからだ。

しかし世の中は、いいことばかりが
続くものではない。

どうやら、日本の小学校へ行く用意
がすすめられているようだった。

これは長男というものの宿命らしく、
彼の精神に負担を強いるのだ。

彼は一匹のネコをとても可愛がって
いた。「ネコちゃんはどうなるの？」

「日本行きの船には、ネコは乗せられ
ないんだよ」と父親が言う。

「そんなの厭だ」貞雄は父親の光雄を
おおいに憎んだ。

もともと男の子は、たいてい父親を
嫌う。母親に愛情を持ち父親を殺そう
とする心理、エディプス・コンプレッ
クスという性向が貞雄にもあったら
しい。

先ほどの家族写真に父親はいなかったから、チョッと説明しておく、一口で言えば顔が長い馬面である。熊本の名物は馬刺しだから、そのせいかどうか……。なんとなく前途は多難らしいが、ここで熊本という土地柄を眺めておこう。

火の国は九州一

むかし「肥の国」といえば、肥前（佐賀県および長崎県）と肥後（熊本県）から成っていたが、「火の国」という場合は、肥後の熊本を指すことが多かった。

噴火する阿蘇山に不知火の海——この奇妙な海の名は、景行天皇が火の国の熊襲を征伐したとき、暗夜に多くの火が海上に現れ、無事に船を岸に着けることが出来たことから、八代海の別称となったようである。不知火町からは「ブラジルのピカソ」と呼ばれる画家・間部学（マナブ・間部）が出るが、これはまたあとの話だ。

阿蘇山のほうは富士山のように美しく静まった山ではなく、外輪山と阿蘇五岳と呼ばれる五つの中央火口丘の総称で、これらが巨大なカルデラなのだ。カルデラはもともとスペイン語で大釜の意味だが、地質学的には火山の中心部にある円形の広い凹所のことだ。噴火後に起る火山中央部の陥没によるもので、一般的には直径一キロメートル以上のものをカルデラと呼んでいるが、阿蘇は別格で途方もなく大きい。

なにしろ外輪山は東西約十七キロ、南北約二十四キロ、周囲約百二十八キロで世界一の規模を誇っており、大観峰に草千里、馬の放牧に乗馬クラブ……カルデラ内に多数の人や牛馬が生活し

ているのだ。

阿蘇の噴火口のあたりに立って見渡すと、月か火星が見知らぬ星か、まあ日本の箱庭的な風景とは異質なものがあり、自分自身も異星人になったような錯覚を起こすことがある。

余分な話になったが、のちに貞雄少年はその雄大な姿を眺めて英気を養うことになるのだから、まんざら無駄話をしているわけではない。旧石器時代の住居跡も見つかっており、宇宙人飛来説を類推させるような天孫降臨伝説の高千穂の峰は東南にあるし、女王・卑弥呼の邪馬台国は西北にあったらしい。

どうやら風呂敷を広げ過ぎたようだ。火の国が超日本的なもの持っているのは確かだが、ミス・テリ・SFの話ではなく、歴史認識の話に入ってゆこう。

古代は大化の改新（六四五）で日本の中央集権化が始まったとき、肥後国は九州唯一の大国になった。^(注)

中世から近世の初めはとばして、嘉永六年（一八五三）にアメリカの提督ペリーが開国を迫って来日する前夜のあたりになっても、肥後熊本は九州の中心だった。

明治維新以後は首位の座を福岡に譲ったものの、熊本地方の豪族・地主等の層も厚いのである。しばらく系図関係のややこしい話が続くが、上塚貞雄（乾信一郎）の精神内界を解く伏線になっているし、あとで必要な名前が出てくるから、几帳面な人は続けて読んで頂きたい。

気の短い人は面倒になったら、とばして読んで、あとで分からなくなったらバックして読み直

すのも一つの方法だろう。

系図のある家系

徳川時代の表現でいえば第十代將軍家治から十一代家斉の頃、肥後の熊本に上塚孫右衛門勇平なる豪族がいた。勇平は寛保元年（一七四一）に生まれ、文化八年（一八一二）まで初代上塚孫右衛門として生き、上赤見村というところの庄屋を勤めた。

勇平の死後、分家から養子に入った広近在二代目孫右衛門を襲名した。彼には二人の男の子がいた。上塚の本家は広近の長男・騏一郎秀実が相続し、「上の上塚」と呼ばれる。

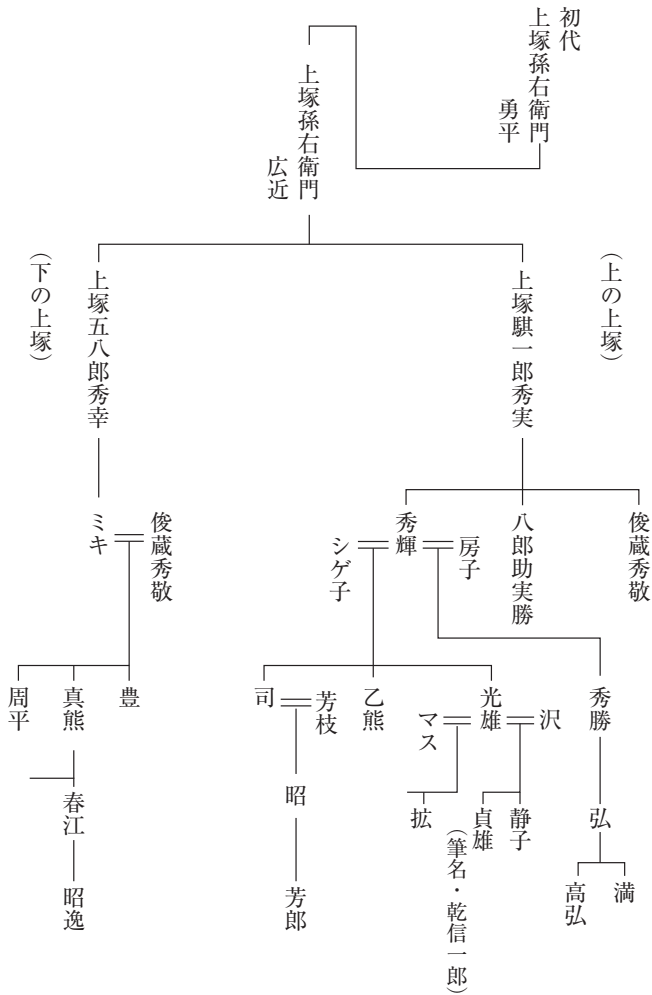
広近の二男、上塚五八郎秀幸は亀井家の養子となったが、のちに上塚姓を名乗った。親元と区別するため、「下の上塚」と称した。

上下の区別は地形によるもので、身分制度上のものではない。本家が、島原湾に注ぐ緑川の上流側にあつたので、こちらを上と呼ぶ。養子に出た五八郎秀幸の家がやや下流側に位置したため、下と呼ばれたのである。サムライみたいな名前が続く。

その五八郎には男児がなかつたので、ふたたび「上の上塚」から養子を迎えた。騏一郎の長男・俊藏秀敬であり、その三男・周平はブラジル開拓の父と称えられている。

他方、「上の上塚」を相続したのは二男・八郎助実勝で、弟・秀輝は実勝の扶養家族となったが、実勝に子がなかつたので、秀輝の長男・秀勝が養子となった。

秀輝は子沢山であつた。房子との間には先述の秀勝をもうけたが、のちに結婚したシゲ子が六



「上」および「下」の上塚家系図

人の子どもを生み実権を握る。その最初の子である光雄が長男ということになり、以下、乙熊、猛、とわ、司、こずえ、と続く。

ところが光雄は北米シアトルに渡り、農園を経営した。彼には妻・沢との間に静子と貞雄の二人の子がいたが、さらに三好マスとの間に健、康、拓の三人を設けた。上塚貞雄（乾信一郎）には異母兄弟がいたわけである。

やれやれ、やつとたどり着いた！ だが系図を見ながら、もう少し付き合って頂きたい。

光雄の弟に司（つかさ）という人がある。これが貞雄の日本における後見人であり、その嫡男の昭（あき）とも密接な関係が続く。昭は感染症学者（注3）だったので、病気のときにはよく相談したものだ。ついにながら貞雄（乾信一郎）には子どもがいなかったため、昭の子・上塚芳郎が著作権継承者となるのである。

さて、ここまでのところで重要な上塚一族中の人物は司や芳郎だが、これまた馬面なのである。牧野を改良して馬を増やしたのは加藤清正であり、近くには馬見原という地名もあるから馬面が多いというわけでもあるまい。大切なのは龐大な系図（注4）が貞雄少年に与えた影響である。上塚貞雄少年がどんな生活を強いられたか、のちに彼が書いたものを眺めておこう。

祖父は八十年代の高齢というわけで、小学生の私が、総領として代理を務めさせられるのだ。

年始のあいさつまわりを初めとして、祝儀不祝儀その他何かと家を代表して出席しなければならぬ。その場で述べなければならぬ言葉を祖父からくり返し教わり、よそ行きのキモノに羽織ハカマ、新しい下駄をはかされる。ハカマのすそが足にまつわりつく、下駄のハナオが指にくいこむ、隣り村までならまだしも、親類の家まで十数キロも、この装束で田舎道を歩かねばならないこともある。

なんともシンドイ話だが、かつて大宅マスコミ塾の秀才だった評論家の草柳大蔵は、「熊本には文化的地熱とも言ふべき黒々した熱っぽさがある」と言った。一方では神道をバックボーンに持つ神風連があり、他方では隠れキリシタンがいて、まことに複雑なのだ。

さてそれでは、上塚家に脈打っている思想とは、どんなものなのだろうか？。

上塚一族精神史

幕末から明治の初めにかけて、手永^(注5)など村の行政区域が数回にわたり変更され、村を統治する者の役職も、惣庄屋、村長、里正、区長、戸長というように変わる。

明治三年（一八七〇）十一月、上赤見村と下赤見村は杉上地区のもとで「赤見村」に一括され、上塚俊藏が初代里正に任命された。明治十二年の郡村制度導入で杉上村は一つの行政区となり、二十二年に自治区になると、俊藏が初代民選村長に就任した。

上塚俊藏は明治前半に、里正、戸長、村長として杉上地区に重きをなした。さらに郡会議員も

務めたのは、家系が江戸時代からの庄屋だったことによるが、幕末の思想家・横井小楠（しょうなん）の弟子として学問があったことも大きな理由とされる。

二男の真熊は大正五年（一九一六）、農地改革の実績が認められて第十代村長に就任した。彼は小楠の孫弟子である蘇峰・徳富猪一郎に師事し、東京専門学校（現在の早稲田大学文学部）に学んで国木田独歩らと同人誌を主宰した。

しかし、郷里・赤見における事業の失敗を立て直すため実家へ呼びもどされる。「下の上塚家」を相続した真熊は、堅実な方法で債務を整理し、村の青年に小楠の実学を指導した。その孫に熊本の外科医・上塚昭逸がいる。

真熊が赤見実行組を組織したとき、俊蔵の三男・周平や、「上の上塚」の光雄・乙熊の兄弟は参加したが、司はまだ幼少だったため参加できなかった。上塚司の父親・秀輝は俊蔵の実弟であるから、司と周平は従兄弟同士だ。年齢は十五歳もはなれていたけれど、周平は司を弟のように可愛がったという。

司はのちにアマゾンの開拓事業に尽力し、衆議院議員（注）を数期務めることになる。ついでに言うところ、国政選挙になれば地盤が問題になるから、杉上だの赤見だのといっても僻地ではない。熊本市南方の近郊で、のちには熊本市に併合された地区もあるくらいだ。

話が明治と平成を往ったり来たりしました。明治末期までバックしよう。

光雄のアメリカ移住も、あるいは実行組における真熊の思想に感化されたからかもしれないし、

周平からの影響があつたかもしれない。

ブラジル移民の父と呼ばれる上塚周平は、明治四十一年（一九〇八）四月、東京帝国大学法科大学（東大法学部）を卒業するとすぐ南米へ行つて成功し、一度帰国したものの再度ブラジルに渡つて、その地に大きく貢献した。経済的な問題が大きいのが、彼自身「飄骨」の号を持つ俳人でもあり、文化面での貢献もあつた。周平や司については、あとでまた出てくる。

その兄の真熊にしても単なる政治屋・実業家ではなく、先述のごとく文学にも親しんでいたわけである。

ここで上塚一族の気風を纏めてみると、リーダーとしての上塚一族という感じがする。まずは代々の庄屋であり、民選村長、衆議院議員などといった政治家の系譜だろう。

次は幕末の開国論者だつた横井小楠しょうなんの薫陶によるものか、海外英雄飛型の血が流れている。

もう一つ加えるなら、文学への趣向・傾斜だ。

さて、これらが貞雄少年にどういった反応を起こさせるのだろうか!?

時は流れ、激動の明治時代は終わろうとしていた。そこでいよいよ、上塚貞雄（乾信一郎）を主人公にした話が始まるのだ。

予告編的にチョッとつけ加えるなら、彼はことあるごとに、「しつかりせにゃいかんバイ」と、しごかれるのである。可哀相に！